

松江市立揖屋小学校 5年生 意見発表要旨

ぼくにとって図書館は、自分の心をウキウキ、ドキドキさせてくれる「おもちゃ箱」のようなところ。図書館には、ぼくが好きなおもしろい物語の本だけでなく、楽しい絵本や科学の本、図鑑や歴史の本などいろいろな本がある。

低学年のころ、ぼくは絵本が好きでいっぱい読んでいたが、中学年になると、文字が多くなり、絵も少ない本が多くてあまり読む気がしなかった。そんな時、学校司書の門脇先生が『マジックツリーハウス』という本を紹介してくれた。ぼくにとってはとても長く感じられたが、先生から主人公やあらすじについて話を聞いているうちにおもしろそうに思えてきて、一巻から二十五巻まで一気に読み進んだ。

それから少し厚めの本も含めたくさんの本を読むようになった。うれしかったのは、借りた本を家で読んでいたとき、お母さんから、「厚い本を読むなんてめずらしいね」とほめられたことと、恐竜についてお姉ちゃんにクイズとして出したこと。中学生だったお姉ちゃんも知らないようなことをぼくが知ることができたのはとてもわくわくすることだった。



この間、門脇先生から、「図書館は育つ」という話を聞いた。ぼくが三年生の時、図書館の本は全部で六千冊くらいだったのが、今では一万冊を超えるのだそうだ。また、休み時間でも調べができるように「自主学习コーナー」ができて、調べたことをすぐメモできたり、プリントに書き込むことができたりするようになった。みんなが図書の時間の勉強でできることが増えて育つのとっしょに、図書館も育っていくんだなあと思った。

ぼくは図書館に来るたびにいつも感じるものが二つある。ひとつは、図書館は安心できる場所だということ。先生たちがいつもいてくれるし、好きな本がたくさん読める。落ち込んだりいらいらしたりすることがあっても、本を読むと心が落ち着いてすっきりする。

二つ目は、頼りになる場所だということ。知りたいことがあればすぐ行って調べられるし、その場でまとめることができ、勉強に生かせる。

ぼくはこれから中学生になっても、いい本を探しに図書館に行きたいし、図書館を使ってすすんで自分の勉強をしていきたいと思う。

島根県立松江南高等学校 2年生 意見発表要旨

わたしは昔から本が好きで今はよく学校図書館に行く。しかし中学校入学当初、わたしが通っていた中学校の図書館は一日中薄暗い部屋だった。

しかしわたしが中3になって学校司書の大隅先生が来られてから状況は一変した。図書館が整備され、ぐっと明るく入りやすい空間になった。これをきっかけにわたしはこれまでにないほど本を読むようになり、ろくに勉強もせずに「本の大量消費」をするようになった。

明るくなった図書館には男女、学年を問わずたくさんの生徒が訪れるようになった。同じクラスにも自分の好きな本について語り合える友だちができた。昼休みにソファの背もたれを倒して寝転び、「こびとづかん」を読んだりした。本の内容について学校司書の先生と話すことはとても楽しいことだった。

高校生になってわたしが気になったのは、図書館がどんな場所だろうかということだった。しかしこの心配は無用で、高校の図書館は明るくて広く、いろいろな企画がしてあり、この図書館を利用できると思うととても嬉しかった。



入学した頃、県西部の中学校から一人で南高に来たわたしは、朝礼前の教室に居づらくて、図書館に行っていた。わたしが好きな有川浩の本を借りたとき、「それおもしろいよ。」と声をかけてくれたのは同じクラスの人だった。別の日に「何かお薦めの本ある？」と声をかけられたのも同じクラスの人だった。こんなふうにして友だちができ、同じようなジャンルを好きな人がいることがわかってとても嬉しかった。その人たちとは今ではとても良い友だちだ。

今は授業でも図書館を利用する。調べものをするとき、インターネットを使うのではなく本を使うことで自分にとって図書館の使い方がさらに広がった。

図書館はただ本を読むだけの場所ではなく、人と人とのつながりの場所であり、新しい自分を見つけられる場所だ。高校生になり忙しくなったが、これからも図書館を利用したいし、たくさんの人に図書館の良さを味わってもらいたいと思う。

国立松江工業高等専門学校 2年生 意見発表要旨

わたしにとって小中学校の学校図書館は、上橋菜穂子さんの「獣の奏者」シリーズや、「守り人」シリーズなど、挙げればきりが無いほど、たくさんのおもしろくて興味をそそられる本との出会いの場だった。中学校のとき、学校図書館にわたしは昼休みの度に行っていたが、それは中学校の学校図書館が読みたい本を探しやすい環境が整っていたからだと思う。

わたしが通った中学校の図書館には、読書ヘルパーという方がいらっしやった。とても話しやすい方で、お薦めの本のことや学校での出来事のことを気軽に話すことができたのも、わたしが図書館に通ったもう一つの理由だったような気がする。

わたしが、図書館で夢中になった「獣の奏者」や「守り人」も、最初は読書ヘルパーの方に薦められたことがきっかけだった。実際に読んでみると物語の世界に引き込まれてしまうような内容で、主人公の生き方にとっても共感し、学ぶことがたくさんあった。おおげさなようだが、今の自分があるのも、作者である上橋さんのおかげ、さらに言えば物語との出会いのきっかけを作ってくれた学校図書館のおかげだと思っている。

学校図書館はたくさんのおもしろい本、主人公の生き方に学ぶことのできた本との出会いを提供してくれた。そして、ただ本を読むだけの場所ではなく、読書ヘルパーの方や図書館の担当の先生、そして、図書館の読書仲間といろいろな本についての情報を共有したり、本の印象を語り合ったりする場でもあった。もっと言えば、自分の知らない世界を覗いてみようとする機会をわたしに与えてくれた場だった。

中学校を卒業してから一年半あまり。わたしは松江高専の二年生になった。今は、忙しくて本を読む機会は減ってきたが、中学時代に親しんだ本たちから学んだことは、少なくはない。今まで自分の考え方に良い意味での影響を与えてきたようにこれからもいろいろな場面で良い影響を与えてくれると思っている。

最近、本を読む機会が大分減ってきている。けれども、これからも、機会があれば少しずつでもいろいろな本を読み続けていきたいと思う。



島根県立松江南高等学校 2年生意見発表要旨

小学校の頃、わたしの中で図書館は「おとなしい」というイメージだった。図書館に通うのは比較的小となしい人だったし、騒いでいる人も図書館の中ではおとなしくなったからだ。

中学校に入学し、初めて図書館を訪れたとき衝撃を受けた。それは「おとなしくない図書館」に出会った瞬間だった。まずそこにいる生徒の多さに驚いた。本を選ぶ人、椅子に座って読書する人、ソファやタタミでマンガや雑誌を読む人・・・狭い通路は譲り合わなければ進めないほどだ。そしてカウンターにはとにかく元気で明るい司書さんと図書委員。カウンターの内外も常に何かで盛り上がっていた。



また、図書館を使った授業では、広告代理店になってキャッチコピーを考えたり、宣伝のためのプレゼンテーションをしたりというものがあつた。グループごとに広告代理店や旅行会社になり、各グループに与えられた商品が売れるようにキャッチコピーを考え、宣伝企画を考えてプレゼンテーションをするのだ。与えられた設定も様々、「カナダツアーを販売する旅行会社」、「海外に着物を売り込む呉服店」等々・・・。そのためにグループで相談したり、資料を探したりと図書館は常に活気にあふれていた。生徒たちは全力で図書

館を活用しようとし、図書館はそれにきちんと答えてくれていた。

そして図書館はみんなの憩いの場でもあつた。放課後になるとただおしゃべりをするために集まって来る生徒がたくさんおり、わたしもその一人だった。友だちと一緒に行くこともあれば、一人で行くこともあつた。図書館へ行けば必ず誰かがいて、話し相手になってくれて、友だちの輪が広がった。本の話はもちろんだが、部活のことや勉強のこと、悩みやくだらないことまでたくさんのお話をした。図書館の中でしか話せないこともあつた。

図書館という場所がわたしは大好きだ。そして東出雲中学校の図書館は今のわたしの原点。図書館とそこで出会えた仲間たちに、わたしは今でも感謝している。



「わたしと学校図書館」と題して意見発表をしてくれた4人の児童生徒と、溝口善兵衛島根県知事